供します。紙上文中、北川と申しますとこの地域や延岡も考え、高千穂、椎葉史に日向全域に拡大して、民氏の言わんとするところを学びましょう。

（羽柴）

〈前墓〉

佐伯と日向、もつとしぼつて佐伯と北川の関係を思うのです。

北川村は見て川内名村（かなもちみょうそん）と長井村に分れていました。私の村は長井ですが、小学校の頃から川内名の友人のことばが、私たちと違うことを変に感じていました。今考えて見れば、アクセントやイントネエーション（抑揚）が佐伯のことばなんです。これは現在でも北浦村あたりは強い類似を示しています。

これはお互に考えて行かねばならない点と思います。

国という制度のなかつた古代のこと。宗太郎、梓山の陵とは、人的政治的道の調通によつて生まれたものに過ぎない。庶民の歴史は政治と超越する。この点をもう少し掘り下げたいと存じます。そしてそれが民俗学であると信じます。

〈後墓〉

〔附記〕

昨年三月史談会が高千穂に参りました際、御案内御指導を頂いた沢先生は、今春高千穂高校から宮崎の県教育庁に御栄転、先日宇佐郡佐田村出身の本草学者賀来飛霞の事蹟調査に来られ、飛霞と交りの深つた秋月樹門その他の資料を求めて佐伯に下車、その御来訪をうけました。

尚沢先生からはこれまで北川村史、北川村郷土史料、高千穂郷土史料等、御研究の貴重な資料を頂いています。感謝しています。会員の御利用を希望しています。

史料

鶴屋城の沿革

——（主として鶴壽略史による）——

年号	紀元	藩公	城のできごと等
慶長七	一六〇二	初、高政	近江安土の人市田祐定来り延ぶ。祐定は織田氏の遺臣にして戦部経営の術に長ず。時に公新城の意あり、因つて召して其の方略を問ふ、甚だ之を奏す。部部の方田堡壁の西道、皆祐定の建つる所を用いしなり。城成り祐定辞去す。
〃九	一六〇四	〃	相模塩屋八幡山に城す。会々白鶴群集す故に号して鶴屋城と曰ふ。一説に山の形鶴の翼を張るに似たり故に名づくと。
〃一一	一六〇六	〃	佐伯の築城成る。公居を移す。中城、陣部、二部、西部、北部、天守閣、望楼、堰橋、皆備はる。廣さ八十九間、高さ十三間、周囲三百三十三間なり。
元和三	一六一七	〃	六月廿五日佐伯第二部の廨舎火し、文書什器多く焼す
寛永一四	一六三七	三、高尚	是の年佐伯第三部の創築成る。
延宝七	一六七九	四、高重	十二月　佐伯第三部の書院、広間、料理間を増し造り、南大門成る。
元禄一四	一七〇一	六、高慶	十一月十五日　始めて太鼓を鶴城第三部楼門に設し懸け、以て時刻を報ずること故の如し
宝永六	一七〇九	〃	五月　公鶴城を修し其の日址を図らんと欲し、幕府に上りて以て允許を請う。西名延山城に上り之を視画す。
享保九	一七二四	〃	九月　新たに南大門を造りて成る。
〃一四	一七二九	〃	四月鶴城の修造成りて楼橋堞壁悉く旧制に復す。唯天守楼を設けず。置酒して群僚を饗す。紙幸行小林師能以下役員に銀を賜ふ
寛延二	一七四九	七、高豆	七月　佐伯修城落成の式典を挙ぐ、宴を群

			昔に場り、養賢寺住職禮深をして上梁文を記して曰く、豊国の南に佐伯有り泰山麓に出ず、高くして大なるを鶴城と曰ふ云々（長文略す）
天明元	一七八一	八高標	五月城中に文庫を造る 云々
享和三	一八〇三	北高誠	五月講武場を城中に造る
安政四	一八五七	二高泰	十月鶴屋城修補成る
万延元	一八六〇	〃	十一月 佐伯藩三郭の舍屋成る、番頭開成美董役す。
文久三	一八六三	二三高謙	八月 南館（天神館又は俗に南御殿といふ）の造営成る。
明治二	一八六九	〃	六月諸侯と共に封土を朝廷に帰す。

（附記）・鶴藩略史からの抜書である。何かの時に手引になれば幸いである。
・藩籍奉還で鶴屋城が国有となつたのは明治二年（一八六九）と解したい。従つて佐伯鶴屋城の歴史は二百六十八年ということになる。

（以上 井柴編）

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

主として木材の流通について

大分県立佐伯豊南高等学校教諭
同校郷土研究クラブ顧問
本会会員　市野瀬　仁

第二章　佐伯港

第二節　その社会的環境（つづき）

四、佐伯港における臨海工業の動向

港に出入する大型貨物船は、臨海にある工場を基点として動いているのが多い。工場は運搬された原料を基礎とし、機械と労働力とで成品を生み出す魔術師のようなものである。その結果巨額の貨幣を生み出す反面、生物の命をおびやかす製造元ともなりうる場所である。

十八世紀英国に産業の革命をもたらして以来、世界は工業化の道を絶やさなかつたばかりでなく、益々高度化したために、二世紀を経た今日人類は超工業化、脱工業化の言葉を聞くようにまでなつた。それは公害の張本人としての悪魔の名の為であろうか。――しかしそれにもかかわらず私達の周辺に工場進出や工業誘致の声は跡を絶たないのはどうしたことだろう。人間社会は常に問題を意識的に抱えてなおかつ希望をつなぎ、緊張と不安の中に生きている複合体であると云える。

生産性営利を第一義とする工業は、輸送費節約の点から臨海にあることが最も経済的であるので、こぞつて位置し集積する。その上国際貿易によつてのみ成立している日本産業界は、特別の業種を除いて臨海を好まない工業は極めて少ない。セメント工業のような重量のあるものや原料とする装置工業は、臨海に建設しようとしてもすでに場所がないと云われている。

港湾は一定の水域と陸域を含むとされているものであるが、接岸地は繁華街の中心地に比すべく、工業界に於いては黄金の土地と云える。

この頃では第一に臨海工業の分布について、第二は主なる工場の紹介と問題点、第三は、海上輸送の特色と佐